研究ノート　四

「ケベス」考

高嶋直人

「ケベス」とは何か、いまだに定説はないようである。

十月十四日午後四時過ぎ日は既に傾き海上おだやかに静かな秋である。国東半島の北端、国見町古江の港は東西に岬あり巾数百メートル、集落は海岸に集中し、二、三十戸ばかり、櫛来の谷を合せても二百戸に満たないであろう。お宮は南面にて、岩倉社の鳥居がある。鳥居を入って巨木の間を進めば左右に廻廊を構えて、由来を偲ばせるたたずまいである。

国見町櫛来から岐部にかけて十二の地区が順番にその年の祭りを担当し、これを〈トウバ〉と呼んでいる。日没のころ白装束の〈トウバ〉の人々が海に入ってみそぎを行ない、境内にはかがり火が処々に置かれ、拝殿の西側には「ケベス」の火が燃えている。拝殿では神事が行なわれる。神饌は、左から、お水、お魚、おカユ(ドブ)、お洗米、お神酒、枝豆、果物、等々七品が供えられ、その前に扇子を副えた「ケベス」の面が供えられている。やがて神事が終れば、釣籤によって選ばれたその年の「ケベス役」が、神官によって神前の「ケベスの面」を着け、神前に跪拝して神官より背に〈勝の字〉を書かれ、ポンと背中をたたかれて起ちあがればこれが「ケベス」の誕生となる。手には六尺ばかりの樫の生木の先端を尖らせ、藁をたばねて芯にし藁縄で堅く巻いた長さ三十センチばかりのものを、棒の先端より五十センチばかりの所に下げて境内にあらわれる。笛、大鼓を先に立て姿勢を低くして、左右を窺うしぐさよろしく肩にかついだ棒を扇子でカチカチとたたきながら境内を廻ること数回、猛炎の中に躍り込もうとする。これを先を尖らせた〈又木〉を持った人々が阻もうとする。かくすること数回、遂に「ケベス」

は手にした棒を火に向けて火中に躍り込む。「ケベス」を防ぐ〈トウバ〉の人々は手に手に燃えさかる火を〈又木〉の棒の先に突っかけて境内から、境内の外まで走りまわる。

「ケベス」とは何か。

一説によれば〈鍛冶の祭〉であるという。岐部、櫛来に多い「岐部氏」鬼篭の「紀ノ氏」はいずれも古くこの地方に於ける鍛冶の家であるといわれる。此の地区から程近い赤根の谷は両子、文珠、千灯、黒木、伊美等、五〇〇メートルから七〇〇メートルの山々をつなぐ両子カルデラの火口底である。赤根山は「鉄穴山」で「鉄穴師」で栄えた処であった。赤い錆の流れる鉄鉱石の産地であった。又、国東半島の海岸には砂鉄が多い。原始の製鉄は何を原料にしていたのであろうか。この赤根にも〈善神王さまの火祭り〉がある。その他、国東半島には火祭りが多い。すべての火祭りが製鉄とつながるものではないであろうけれども見逃すことのできないことであろう。

けれども何故にケベスなのか。

境内の由来記によれば御祭神は、

帯中津日子命
息長帯日売命
品陀和気命
奥津島姫命
市寸島比売命
多岐都比売命

以上の六柱となっている、息長帯日売命以下は宇佐神宮と同様であり、帯中津日子命は仲哀天皇であるから御祭神から見た此の神社の成り立ちは宇佐神宮の御分霊と考えられる。

神功皇后の御櫛が流れついたと伝えられる伝説は、九州北部の沿岸部に多い神功皇后説話の一つであって、櫛来の地名に由来する後世の説話であると思われる。けれども「ケベス」の謎を解く鍵はいづかたより海を越えて流れついたこの櫛の物語りの中に秘められているのではないだろうか。

「クシ」は奇（くし）である。「荒魂」（あらみたま）「和魂」（にぎみたま）「奇魂」（くしみたま）等といわれる古代の言葉である、不思議なもの、すぐれた力を持つ意味である。その年の「ケベス役」を決めるのに釣籤を用いる籤は「奇（く）じ」であり「くし」である。誰に当るか分らない霊妙不思議なものである。神前に捧げる玉串（たまぐし）、記、紀神話の中の「奇稲田姫（くしなだひめ）」「槵日（くしひ）の高千穂の峯」等も皆「奇し」であり、物の怪は後世の言葉であるけれど「キ、ク、ケ」と変化する一例である。

「ケベス」の祭りを行なう人々〈トウバ〉は「火をまぜない」という。その年の〈トウバ〉の人々は精進潔斎を行ない他の家の火を用いたものを食べず、子供は学校にも自家製の弁当、のみならず水筒までを持参するといわれる。他家の火を用いた飲食を拒否すること実に異常としかいいようがない。「ケベス」に於いて火を神聖なものとすることは、正にすべてを超えた絶対的なものである。なぜか……

「ケベス」の火は通常の火ではない。「ケベス」を祭る部族の火は他部族を圧倒する力を持った超能力的な火なのである。故に他部族にその火を盗まれることを恐れるのである。

異様な面を着けた祭事の「ケベス役」は神聖な火を盗みに来た他部族の神である。彼等は部族をあげて木槍の武装を整えて防戦に努める。だが遂に火は盗まれた。その火を持ち帰った里人はこの神聖な火、即ち当時最高度の技術を得て、更に他の部族に盗まれることを恐れて彼を神と祭り、一致団結してこの「ケベス」の祭りを始めたのではないだろうか。

此の地の伝説によれば神功皇后の御櫛が海上から小崎の鼻に流れついたので元宮を祀り其の後現在地に遷（うつ）しまいらせて、岩倉八幡となったといわれているが、はじめに書いたように南面する拝殿に向って正面の鳥居は岩倉社であり、拝殿の側面、西

側と裏手に当る北側の鳥居は八幡社となっている。先に述べたように現在の御祭神は八幡社であるけれど、本来の御祭神は今これを訪ぬべくもない。強いて言えば「ケベスの神」であろう。

古代「えびす」とは異民族を指す言葉であった。「えびす」は「えみし」といい、国東半島に於いては「えべす」と発音する。「恵比須、大黒」は「えべす、だいこく」であり、蛇（へび）は「へべ」と発音する。即ち「ケベス」は「ケエベス」であろう、そして、「ケエベス」は「クエベス」であり古事記、少彦名伝承に登場する「クエビコ」も又同類の言葉であると思われる。櫛来の地名は「奇しき、エ、ベス、」であろう。そして「奇しきエベス」は「クエベス」となり「ケベス」となったものではなかろうか。では櫛とは何か、諸橋、大漢和（巻六）によれば、「たきび、燃えさし爽に通ず」と書かれている。

櫛は普通髪を梳くものであるけれど、このように火に由来する意味をも持っている。古事記の有名な物語り、伊耶那岐の命が黄泉国に伊耶那美の命を追うてその闇黒の中で湯津爪櫛の男柱一箇取りかきて一つ火燭して…とあるように櫛と不思議の火との関連性をこの物語りの中にも知ることができる。櫛来の東には岐部の谷がある。ここは櫛来と共に岐部氏が多い、又西に伊美の谷を越えて鬼篭の谷がある。

ここは紀ノ氏の土地である。岐部氏、紀ノ氏、共に古代製鉄、鍛冶に関する氏族であるといわれる。キ、ク、ケ、と転化した発音は奇、鬼に共通したものであり、此の氏族は海を渡って来た人々であろうか、それとも不思議の火を手中にした里人であろうか。海上から流れついた櫛とは、海を越えて奇しき火をたずさえてきた渡来民族である。当時その土地の人々の知らなかった「製鉄、鍛冶」の技術を持って古江の海岸で砂鉄を採る火を燃やした人々であった。それはペルリの黒船にたった四杯で夜も寝られなかった驚き以上のものであったかも知れない。それはいつの頃であったのであろうか。

弥生時代の中期に於いて九州北部には既にかなりの鉄製品が出土している。更に弥生後期に於いて爆発的な増加を見る事ができる。

種類も非常に豊富になって、武器以外に斧、鉋、ノミ、鎌、鋤先、タガネ、釣針等農工具、生活用品にまでひろい範囲に鉄

器が行きわたる。大神の比義が鍛冶の翁となって示現したといわれる宇佐神宮の伝説よりも遙に古い時代、恐らく弥生時代に遡るものではないだろうか。「魏志」倭人伝には次の記述がある。

「兵（武器）は矛、木弓を用う、木弓は下を短く上を長くし、竹の箭は或は鐵鏃、或は骨鏃」当時は石器、木器、鉄器の混用時代である。倭人伝の頃弥生の後期には急速に北部九州に於いて石器が鉄器に交替してゆくことは今日考古学の常識になっている。弥生前期末から中期と見られる佐伯市下城遺跡に於いて、釘状のもの六十数点の出土を見ているが、更に多量の鉄滓と吹子羽口（土製送風管）と見られるものも出土し、製鉄がおこなわれたことを裏付けるものといわれている。従来九州北部に於ける弥生時代の鉄器は、舶載の素材を用いたものといわれていたが、近年福岡市西南部に於いて多くの製鉄遺跡と見られる鉄滓出土例が発見されている。国東半島に於いても今日迄の出土品を整理検討すると共に今後の発掘に期待したいものである。また櫛来に於いて「鹿の肉」を食べることは近年迄きびしく禁じられていたと云われる。なぜか、鹿の皮は非常に柔軟で耐久力に富む、鞴の材料として最高のものであったからだと思われる。

ところで舶載鏡（中国製）と云われ卑弥呼の鏡と云われている「三角縁神獣鏡」が国内産であることが近年立証されたように、この製鉄技術をもたらしたケベスの神は半島系であったのか、江南系であったのか。世界で始めて製鉄を行なったのは従来アルタイ山脈周辺の遊牧民であるといわれていたが、近年中国の製鉄はこれと別箇に江南方面に於いて発生したものであることがわかってきた。呉王扶差にまつわる干将、莫邪の剣の物語りなどで知られるように、中国の史書に於いて鉄器が先づ登場するのは楊子江の中流から下流にかけての一帯、呉、越、楚の三国である。中国春秋の時代、殆ど史書に登場しない呉の国が急に強国となって戦国の時代に活躍する、そこには鉄器の発達を無視することはできない。

鉄は古くは〈銕〉と書いた。当時〈銕〉の字であらわされるのは、東夷の金属であることを示している。黄河流域の漢文化の中心から見れば、呉地は東南即ち東方未開の国なのである。北方アルタイ方面の遊牧民が最初にもたらしたものならば〈銕〉という字は使われない筈である。ところでその製鉄法であるが、北方アルタイ系のものは鍛鉄法であり、南方江南系のもの

は錬鉄法であるといわれる。NHK特集によれば「稲荷山鉄剣」は江南より舶載された焙焼鉄を素材として、国内に於いて鍛造されたものであるという。漢の時代、朝鮮半島はその支配下にあった。その中心「楽浪郡」はその南に豊富な黄海道の鉄鉱山を控えている。当然製鉄の技術は楽浪郡に持ち込まれたものと考えられる。奇しき火を灯して海を渡って来た「ケベス」の神のふる里はいずれの系統であったのであろうか。

縄文人と呼ばれる原日本人と、各時代、各方面からの渡来人との闘争、共生、そして融合の過程を経て、倭人となり、現在の日本人が形成されてゆく一つの断面を、一夜の祭りの中に見る思いであった。

大分県地方史料叢書(七)

「縣治概略」(Ⅰ)
「縣治概略」(Ⅱ)

大分県成立以来の布告達を集大成した
県草創期を知る基本史料
(会員各二五〇〇円、会員外各三〇〇〇円)
発行所　大分県地方史研究会

増訂
豊後大友氏の研究
渡辺澄夫著　■新版完成

謎の多い初代能直以来の大友氏の歴史に科学のメスを加えた初版に新たな論文を増補した著者二十余年間の研究の結晶。〈初版御講読の方は、誤植・誤脱がありましたので無料でお取替えします。当社までお申し出ください〉　A5・定価三、八〇〇円

〒810　福岡市中央区大手門3―5―4
電(092)741―6006
第一法規　九州支社